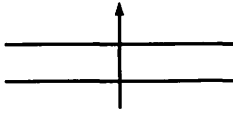


- ③ 過馬路。
通過馬路。
穿過馬路。
(道をわたる)



〈注2〉 筆者は、例文(72)(73)の中国語訳を、11人の中国人にしてもらった。(11人は、北京大学大学院の院生で、日本語を第二外国語として、3年間ないし9年間ほど勉強してきたものである)調査

の結果をいうと、「すぎている」を、移動動作の進行中だと訳した人は、10人であった。すでに移動動作が完了し、結果として、動作の主体が移動する領域の外側にいる状態だと了解した人は、1人しかいなかった。つまり、11人中、10人ほど、(72)(73) (図5) の状況を、(74)から(81)まで (図6) の状況だと考えたわけである。

言語経歴：1953年4月から1983年2月まで中国西安市 1984年4月まで横浜市神奈川区 現在東京都目黒区 (東京都立大学大学院学生)

ふく(拭)・ぬぐう

仲野 智

1. はじめに

小論でとりあげる「ふく」「ぬぐう」については、徳川・宮島1972 (p.342) で次のように記述されている。「ふく」「ぬぐう」それほど大きなちがいはなく、「汗を(ひたいを・よごれを・机を)～」などについて、「ふく」「ぬぐう」どちらも使える。ただし、どちらかといえば、「ふく」は、ひたい・机など、きれいにされるもののほうに、「ぬぐう」は、汗・よごれなど、とりさられるもののほうに、重点がある。それで、ひろい場所の全部を対象として、「ろうかをすみからすみまでふく」のようならば、あいには、「ぬぐう」よりも「ふく」が適当だ。

【文体】「ぬぐう」は文章語的。

また、柴田編1976 (p.111~112) では、「ふく」を「とぐ」(研)「みがく」(磨・研)と比較し、「さっと一息に、つまり片道運動によってフキ取る」「対象物とは別の物を取り除く」「対象物がよごれていない状況にする」としているが、「ぬぐう」について具体的な意味分析をおこなっているものは見当たらない。

小論では、これまで比較されることのなかった「ふく」と「ぬぐう」の二語について、意味分析をおこなう。

2. 辞書の記述

『日本国語大辞典』では、「ふく」「ぬぐう」は次のような記述がなされている。

「ふく」 布・紙などでよごれなどをふきとる。ぬぐう。

「ぬぐう」 ①ふいてきれいにする。こすって除く。ふきとる。ふく。

②恥・汚点などを消し去る。きよめる。そそぐ。

「ふく」「ぬぐう」が互いの意味の説明のために使われていることと、2.に当たる用法が「ぬぐう」にしか見られないことに気付く。この点については、他の辞書でも大差はない。

3. 分析

3.1. 動作の主体

(1) 太郎が 顔を ふく。

(2) 太郎が 顔を ぬぐう。

上のように両語とも人間を主体とする。人間以外のものでは、

(3) マストの突端の日章旗が星をぬぐうようにはためいて……

(石川達三・蒼氓) (『学研国語大辞典』より)

のように非情物を主体とした用例も見られるが、それらは擬人的な用法と考えるべきであろう。したがって、「ふく」「ぬぐう」とともに動作の主体は、人間またはそれに準じるものとする。

3.2. 動作の対象

3.2.1. 対象となるもの

徳川・宮島1972では、「ふく」「ぬぐう」の対象を「きれいにされるもの」と「とりさられるもの」に分類し、両者に対する重点の置き方が両語の間で異なるとしている。(例えば、「汗をふく」の「汗」は「とりさられるもの」であり、「机をふく」の「机」は「きれいにされるもの」である。)しかし、具体的な意味分析をしているわけではない。以下、徳川・宮島1972の議論と重なる部分も出て来るが、用例をあげて考察する。

なお、以下の分析で用いる「場所」「よごれ」は、徳川・宮島1972でいう「きれいにされるもの」「とりさられるもの」にそれぞれ該当することを申し添えておく。

まず、「ふく」も「ぬぐう」も対象として「場所」をとる。

- (4) ひたいを ふく。
- (5) ひたいを ぬぐう。
- (6) めがねを ふく。
- (7) めがねを ぬぐう。

次に、「ふく」も「ぬぐう」も対象として「よごれ」をとる。

- (8) 汗を ふく。
- (9) 汗を ぬぐう。
- (10) 血を ふく。
- (11) 血を ぬぐう。

ただし、対象となる「よごれ」が抽象物になると、「ふく」は使えない。

- (12) *恥を ふく。
- (13) 恥を ぬぐう。
- (14) *汚名を ふく。
- (15) 汚名を ぬぐう。

辞書の記述にもあるように、これは「ぬぐう」にしかない用法である。比喩的用法として3.6.でもう一度検討する。

3.2.2. 対象の状態

次に対象となる「場所」「よごれ」の状態について考える。

- (16) 机を ふく。
- (17) ?机を ぬぐう。
- (18) 床を ふく。
- (19) ?床を ぬぐう。

以上の例のうち、(17)(19)では「ぬぐう」が使にくい。「机」や「床」は「ひたい」よりも面積がひろいと考えられるが、この「面積のひろさ」が「ぬぐう」を使いくくしていると思われる。そこで面積の広さをもう

少し明確にした例を見る。

- (20) 一面血だらけの床を ふく。
- (21) ?一面血だらけの床を ぬぐう。
- (22) 少し血の垂れた床を ふく。
- (23) 少し血の垂れる床を ぬぐう。

「汗をふく」(8)「血をふく」(10)でも、「場所」を設定して、同じように状況を特定できる。

- (24) 床一面にひろがった血を ふく。
- (25) ?床一面にひろがった血を ぬぐう。
- (26) 床に少し垂れた血を ふく。
- (27) 床に少し垂れた血を ぬぐう。

以上の例のうち、(21)や(25)のように、血が床一面にひろがっている場合には、「ぬぐう」は使にくい(使えないという人も多いようである)。

ところで、床に血も何もついていない場合には、どうであろうか。

- (28) 特によごれていない床を ふく。
- (29) ?特によごれていない床を ぬぐう。

(29)のように、床がよごれていない場合には、「ぬぐう」は使えない。

また、徳川・宮島1972で指摘されているように、ひろい場所の全部を対象とする場合には、「ぬぐう」は使にくい。

- (30) 床を すみからすみまで ふく。
- (31) (?)床を すみからすみまで ぬぐう。

さて、最後に視点を変えて、対象が粉末、液体、固体である場合を考えてみよう。

- (32) 床に垂れた血を ふく。
- (33) 床に垂れた血を ぬぐう。
- (34) 床にこびりついた血を ふく。
- (35) ?床にこびりついた血を ぬぐう。

以上の例のうち(35)のように、「よごれ」が固体の場合には、「ぬぐう」は使にくい。ただし、対象がぬれたぞうきんのようなもので除去できることが明らかな状況ならば、「ぬぐう」は使える。

- (36) チョークの粉を ぬぐう。
- (37) 床にこびりついた血を ぬれたぞうきんで ぬぐう。

以上の例のうち(35)のように、「よごれ」が固体の場合には、「ぬぐう」は使にくい。ただし、対象がぬれ

○「ふく」は、よごれた部分の面積や「よごれ」の有無に関係なく使える。「場所」の面積にも制限がない。

○「ぬぐう」は、よごれた部分の面積がひろい場合や、「よごれ」がない場合には、使にくい。ひろ

い場所の全部を対象とする場合にも使いにくい。

- 「よごれ」の状態は、「ふく」が特に制限がないのに対し、「ぬぐう」は液体以外には使いにくい。

3.3. 動作の結果の状態

以上の分析では、ふいたりぬぐったりした結果、「よごれ」が除去されたのかどうかには触れなかった。そこで、以下に例をあげる。

- (38) 床についた血を ふいて きれいに落とした。
(39) 床についた血を ぬぐって きれいに落とした。

このように、結果的に血が除去される場合には、両語とも使える。一方、血が全く除去されない場合には、「ぬぐう」は使えない。

- (40) 床についた血を ふいたが 少ししか落ちなかった。
(41) 床についた血を ぬぐったが 少ししか落ちなかった。
(42) 床についた血を ふいたが 少しも落ちなかった。
(43) 床についた血を ぬぐったが 少しも落ちなかった。

ただし、(41)のように動作の結果少しでもなんらかの変化がおきれば、「ぬぐう」も使える。つまり、「ぬぐう」は「よごれ」を除去することである。

3.4. 動作の様態

「ふく」と「ぬぐう」では、動作の様態に違いが見られる。

- (44) 床についた血を さっと ふく。
(45) 床についた血を さっと ぬぐう。
(46) 床についた血を 何回も ふく。
(47) 床についた血を 何回も ぬぐう。
(48) 床についた血を ごしごしと ふく。
(49) 床についた血を ごしごしと ぬぐう。

このように、「ふく」は動作の回数に関係なく用いることができるが、「ぬぐう」は複数の動作で「よごれ」が除去できない場合には使いにくい。

図1

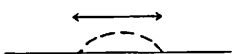


図2



さて、ここで一つの仮定を試みよう。すなわち、「ふく」は、図1のように「ものの表面になにかを密着

させて動かす動作」であり、必ずしも「よごれ」が除去されなくともよい。一方、「ぬぐう」は、図2のように「よごれ」を除去すべくそれをすくいあげる動作」である。この仮定は次のいくつかの点から根拠づけられる。

第一に、「ぬぐう」は、よごれた部分の面積がひろかったり、ひろい場所の全部を対象としたりすると使いにくかった。それは、「ぬぐう」が「よごれ」を一回ですくいあげる動作だからである。

第二に、「よごれ」の状態が固体の場合には、「ぬぐう」は使いにくかった。それは、固体では一回の動作ですくいあげることが不可能だからである。

第三に、「ぬぐう」は「よごれ」を除去することであると述べたが、「場所」に「よごれ」がともなわない場合には、除去がありえないため「ぬぐう」は使えない。また、よごれた部分の面積がひろい場合には、すくいあげる動作では「よごれ」の除去がむずかしいため「ぬぐう」はやはり使いにくい。

以上、「ふく」「ぬぐう」の示す動作の様態について考察をおこなった。まとめると以下ようになる。

- 「ふく」は、「ものの表面になにかを密着させて動かす動作」であり、必ずしも「よごれ」が除去されなくともよい。動作の回数にも制限がない。
○「ぬぐう」は、「よごれ」を一回ですくいあげることによって除去する動作である。

なお、柴田編1976の「ふく」に関する「さっと一息に、つまり片道運動によってフキ取る」という記述は、これまでの分析からして適当でないことがわかる。

3.5. 手段

柴田編1976や辞書の記述にもあるように、「ふく」の手段として使われるのは、「布・紙」などである。これは「ぬぐう」も同じである。

- (50) ぞうきんで 床を ふく。
(51) ぞうきんで 床を ぬぐう。
(52) ハンカチで 汗を ふく。
(53) ハンカチで 汗を ぬぐう。
(54) 手で ひたいの汗を ふく。
(55) 手で ひたいの汗を ぬぐう。

しかし、必ずしも「布・紙」を使わない場合もある。この例では手段こそ違え、「布・紙」と同じ結果をもたらしているといえる。

3.6. 「ぬぐう」の比喩的用法

3.2.1. で見た「ぬぐう」の比喩的用法についても

一度考えてみよう。

これまで繰り返し述べてきたように、「ぬぐう」は「よごれ」を除去することであるが、比喩的用法とは、恥や汚名といった抽象物が「よごれ」に相当する場合である。辞書でこの「ぬぐう」が「消す」「きよめる」「消し去る」などと説明されていることからわかるように、この場合の「ぬぐう」はこれらの抽象物を取り去る行為である。その意味で、「ぬぐう」の意味が生かされた用法である。

一方、「ふく」は必ずしも「よごれ」の除去をとまわらない。したがって、恥や汚名を取り去る行為を表現するには、不適當である。

「ぬぐう」にあって「ふく」にはないこの用法は、以上のように説明できよう。

4. まとめ

以上の分析を次にまとめる。

「ふく」

ある場所に布・紙状のものを密着させて動かす動作。

「ぬぐう」

すくいあげることによって、よごれを除去する動作。

言語経歴：1962年6月 東京都文京区生 0～
6歳 千葉県松戸市 6歳～ 横浜市緑区
(東京都立大学学部学生)

ぼける・ぼやける・ぼんやりする

大島 資生

1. はじめに

国立国語研究所1964では「ぼける」は「2.300感覚、疲労、睡眠」に、「ぼやける」は「2.501光」に分類されている。また、「ぼんやりする」については、この形での記載はないが、「ぼんやり」が、「3.300意識、感覚」と「3.501光」にそれぞれ分類されている。

一方、いくつかの辞書にあたってみると、「ぼける」については「色が薄れてははっきりしなくなる」「物の輪郭がぼやける」(『広辞苑第三版』)、「色・輪郭がぼんやりする」(『三省堂国語辞典第三版』)、「はっきりとした映像・色感が得られない状態になる」(『新明解国語辞典第三版』)など。「ぼやける」は「輪郭がはっきりしなくなる」(『三省堂国語辞典第三版』)など、「ぼんやりする」は「ぼんやり」の項で、「物の形、焦点がはっきりしない様子」(『新明解国語辞典第三版』)、「りんかく、形、色などがはっきりほかとは区別できないようす」(『三省堂国語辞典第三版』)などというふうに記述されている。

以上の記述から、これら三語はいずれも広義の視覚動詞であると考えて差し支えないだろう。また、辞書の記述の中で目立つことは、しばしば「はっきりしなくなる」という表現が用いられていることである。以下では「はっきりしなくなる」という現象を「不明瞭化」と呼ぶことにする。

ところで、視覚動詞について、さらには「見る」という行為について考えた場合、そこには必ず、「見るもの」と「見られるもの」が存在する。これをそれぞれ、「見る主体」「見る対象」と呼ぶことにする。

2. 分析

まず、次の例文を見てみよう。

(1) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼける。

(2) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼやける。

(3) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼんやりする。

(1)～(3)の文では「ぼける」「ぼやける」「ぼんやりする」はほぼ同義であり、ニュアンスの差も認めにくい。したがって、単なる入れかえ作業によって三語の意味的な差を探るのは困難であると予想される。そこで、若干視点をかえて、まず比喩的、あるいは慣用的な用法について考えてみることにしよう。というのも、比喩的・慣用的な用法は、何らかの形でそれぞれの語の本来の意味特徴を反映する場合もあるからである。

2.1. 比喩的・慣用的用法

(4) 年をとって 頭が ぼける。

(5) 〇年をとって 頭が ぼやける。